

ブラジル帝政時代におけるヨーロッパ 移民の導入と移住地建設

丸 山 浩 明

I はじめに

1808年、ナポレオン戦争によるフランス軍の侵攻で本国を追われたポルトガル王室は、イギリス海軍に護衛されて植民地ブラジルへ亡命し、リオデジャネイロに遷都した。1815年には同君連合の「ポルトガル・ブラジル及びアルガルヴェ連合王国」が誕生し、ブラジルは植民地からポルトガルに比肩する王国へと変わった。しかし、1816年に連合王国の王位についたジョアン6世は、皇太子ドン・ペドロを摂政としてブラジルに残し、1821年にブラジル国王を兼ねたままポルトガルに帰還してしまった。

皇太子ドン・ペドロに対してもポルトガルが帰国要請を行う中、ブラジルでは彼を皇帝に擁立して、連合王国からの独立を模索する動きが活発化した。そして1822年9月7日、ポルトガルへの帰還を拒否（フィコ宣言）した皇太子ドン・ペドロは、サンパウロにあるイピランガの丘で「独立か死か」と叫び（Grito do Ipiranga）、ブラジルの独立を宣言して初代皇帝ドン・ペドロ1世として即位した。

こうして、ブラジルでは約300年続いたポルトガルの植民地時代（1500～1815年）が終わり、「ポルトガル・ブラジル及びアルガルヴェ連合王国」時代（1815～1822年）を経て、ついにブラジル皇帝が統治する帝政時代（1822～1889年）を迎えた。しかし、ドン・ペドロ1世はポルトガルの王位継承権を保持したままブラジル皇帝となったため、1826年に父ジョアン6世が死去すると、ポルトガル王位の継承をめぐる叔父ドン・ミゲルと対立関係になった。1831年、ドン・ペドロ1世は、ポルトガル王位を叔父のミゲルから長女のマリア・ダ・グロリア（後のマリア2世）に奪還するため、まだ5歳だった皇太子ペドロ・デ・アルカンタラ（後のドン・ペドロ2世）に譲位してポルトガルに帰還してしまった。そのため、帝政時代の中でドン・ペドロ1世が統治した期間を「第一帝政期（1822～1831年）」と呼んでいる。

まだ成人年齢（18歳）に達しない14歳の皇太子を、1840年、超法規的措置により成人とすることで、ブラジル生まれの皇帝ドン・ペドロ2世が誕生した。幼少だった皇太子が皇帝として即位するまでの期間は、皇太子に代わり摂政府が置かれてブラジルが統治されたため、この期間は「摂政期（1831～1840年）」と呼ばれている。ドン・ペドロ2世の即位後、1889年に共和制に移行

するまでの期間は、君主制の下で長く「第二帝政期（1840～1889年）」が続いた。

19世紀のブラジル帝政時代は、その国体が根本的転換を迫られたという意味において、ブラジル政治史におけるきわめて重要で激動の時代であった。すなわち、約300年続いた奴隷制に基礎をおく植民地時代と決別し、国家としての独立と自由労働力に基づく新たな国作りが模索され、結果的に今日に至る共和制を招来する揺籃期となったからである。

本稿では、ポルトガルの植民地時代と決別し、独立国家としての道を歩み始めたブラジルの帝政時代に焦点を当てる。そして、この激動の時代に発生したさまざまな国家的難題が、ヨーロッパ移民の導入といかなる関係を有し、それがどのように進められたのかを明らかにする。

Ⅱ 国家建設の新たな課題

1. 頻発する反乱と戦争

帝政時代には、ブラジル各地で反乱や戦争が頻発した。独立直後の「第一帝政期」には、ドン・ペドロ1世が1824年に発布したブラジル最初の憲法に対する強い不満から、アメリカ合衆国をモデルにした連邦共和国の樹立を目指す革命がペルナンブコ県で勃発し、近隣諸県を巻き込んで「赤道連盟」の反乱へと拡大した。1824年憲法は、皇帝により「人民」に下付されて誕生した権威主義的な欽定憲法で、「人民」とは投票権を持ち政治に参加できる限られた白人や混血者のことで、奴隷はもとより国家を構成する多くの自由人の個人的権利すら等閑視されていた。

1825年には、ジョアン6世が1820年に占領してシスプラティーナ県としてブラジル王国に編入したバンダ・オリエンタル（現在のウルグアイ）で反乱が起こり、ブラジル帝国からの独立とリオ・デ・ラプラタ連合州（現在のアルゼンチン）への統合が宣言された。そのため、ブラジルとリオ・デ・ラプラタ連合州間で「シスプラティーナ戦争（アルゼンチン・ブラジル戦争）」が勃発した。1828年、イギリスの仲介で和平条約が締結され、ひとまず戦争は終結した。ブラジルは、シスプラティーナのウルグアイ東方共和国としての独立を承認する一方で、ブラジル奥地のマットグロッソ地方へ向かう主要な交通手段であったラプラタ川水系での船の自由な航行権を確保した。しかし、この戦争で絶対君主制に対する国民の不満が全国的に広まった。

摂政期は政治が混迷し、各地で反乱が勃発する波乱の時代であった。南部では1835年に「ファラーポの乱（ファロウピーリャの反乱）」が起きた。これは牧畜を営む南部の農場主とガウショ（牧童）が共闘し、自治権の拡大を求めて政府軍と戦ったもので、反乱は周囲に拡散した。1836年にはリオ・グランデ共和国、1839年には隣のサンタカタリーナ県でジュリアナ共和国の樹立が宣言される事態となったが、1845年、ペドロ2世即位後の恩赦と減税により反乱は終結した。

北部や北東部でも反乱が頻発した。1835年には、パラ県で政府軍とカバーノ（掘立て小屋に暮す先住民や混血者）からなる反乱軍が衝突した「カバナーゼンの反乱」、バイア県で黒人イスラム教徒のマレが国家樹立を目指した「マレの反乱」が起きた。また1837年には、バイア県で連邦制と共和主義に共鳴する中間層や商人らが、ジャーナリストで教師のフランシスコ・サビーノの下に蜂起して政府軍と戦った「サビーノの反乱」が起きた。さらに1838年には、マラニョン県で「自由」の大義を掲げ、都市カシアスを占拠して政府軍と戦ったバライオ（籠のことで反

乱軍リーダーの職業に由来) たちの「バライアーダの反乱」が勃発している。

反乱や戦争は第二帝政期を迎えても続いた。1842年には、サンパウロとミナスジェライス両県で「自由主義者の反乱」が起きた。これはコーヒー税の脱税阻止と奴隷貿易の取締り強化を企図した政府と、それに反発したジョアキン・デ・ソーザ・プレヴェスを指導者とするコーヒー農園主たちが衝突したもので、帝国政府の支持基盤の弱さを露呈する事件であった。また1848年にはペルナンブコ県で、共和主義者のボルジェス・ダ・フォンセッカをリーダーに、連邦制の導入やポルトガル人の追放、普通選挙の導入などを目指して政府軍と衝突する「プライエイラ革命」が勃発した。

さらに1864年には、パラグアイのソラノ・ロペス大統領がウルグアイへの内政干渉を理由にブラジルに対して宣戦布告を行い、「パラグアイ戦争」が勃発した。ブラジルは翌年、アルゼンチン、ウルグアイとの間に三国同盟を締結して、当時強大な軍隊を保有していたパラグアイと激戦を繰り広げた。1870年、パラグアイ戦争は三国同盟側の勝利で終結したが、ラテンアメリカで最も凄惨な戦争として語り継がれるように、敗戦国はもとより戦勝国側の人的・経済的痛手も甚大であった。イギリスから膨大な借金をして戦費を賄ったブラジルは、戦後にその債務で財政危機に陥った。

2. 領土的一体性の課題

帝政時代に頻発した数々の地方反乱は、いずれも各地域の経済・社会・文化的特性に起因しており、一つの型に収斂させることは困難である。しかし、その背景には中央集権的な絶対君主制に対する民衆の反発と、その裏返しである地方分権（県自治権）の拡大、個人の自由保障（奴隷制廃止も含む）、連邦制や共和制への移行、などを求める勢力の結集があった。それが武力をとって連鎖的に各地で噴出し、結果的に政府軍に鎮圧されるという経過を辿った。頻発する地方反乱は、先の植民地時代に構築された「豊かな沿岸部」と「忘れ去られた貧困の奥地（セルトン）」、「都市」と「農村」という、国内で徹底的に分断されたままの新しい国家が内包する、領土的一体性の確保をめぐる深刻な課題を露呈させる結果となった。

それでも国家分裂には至らず、辛うじて領土的一体性を確保できた背景には、イギリスを先頭に国際的な圧力が強まる奴隷制廃止運動に対峙するためにも、地方（県）の分離独立運動を全力で押さえ込む必要があった。また、「ファラーポの乱」に象徴されるように、経済・社会・文化的にもウルグアイなどに近似したブラジル南部の諸県が、アルゼンチンやパラグアイの支援を得て分離独立したり、これらの国家からの直接的な領土侵攻を阻止したりするためにも、それまで無関心だった広大な国土の辺境を開発し、国内の隅々まで領土的一体性を確保できるように全力で取り組む必要があった。

実際、「パラグアイ戦争」では、戦場と化した国境地帯に兵力や兵糧、軍事物資を迅速に補給できず、各地で劣勢や敗走を強いられる苦い経験を得た。そのため、帝国政府は広大な奥地の開発が喫緊の重要課題であることを強く認識するに至った。とりわけ、河川を通じて往来が容易なペルーやボリビアと国境を接するアマゾン西部や、ブラジルにとって大きな脅威であるアルゼンチンと国境を接するブラジル南部において、国家を挙げて奥地で植民開発を進めることが急務と

なった〔丸山 2015〕。

その際、領土の一体性の確保に必要なインフラ整備の要として注目されたのが、沿岸部の都市と奥地の国境地帯を結ぶ鉄道建設であった。戦略的に鉄道を敷設し、人や物資を大量かつ短期間に奥地に投入できる体制を整えることは、辺境での植民開発はもとより、有事の際の兵站部の活動にとっても重要であった。こうして、奥地に向かう交通インフラの整備とその沿線の植民開発が、とりわけ第二帝政期に集中的に進められた。

ブラジルでは、1854年に完成したマウア鉄道（リオデジャネイロと皇帝の別荘地ペトロポリスを結ぶ）を皮切りに、各地で次々と鉄道建設が始まり、1854～1907年に合計88路線が着工した。このうち、全体の84%にあたる74路線は、コーヒーなどの輸出産業が急成長をみせた1870～1890年代に集中的に建設されている。これにともない鉄道の敷設距離も1870年以前の約750kmから1870～1880年代の9,000km、そして1890～1910年代の11,000kmへと急伸している〔Dickenson 1982〕。

鉄道に代表される交通インフラの整備とともに、帝政時代を特徴付ける出来事が外国人移民の大量導入である。植民地時代、沿岸部のサトウキビ農場や奥地の金鉱山での労働を支えたのは奴隷労働力であった。しかし帝政時代に入ると、国際的な奴隷制廃止運動の圧力が強まる中で、奴隷に代わる自由労働者の安定的確保が重要な課題として浮上した。折しも、ブラジルでは19世紀に「コーヒーサイクル」が到来し、その主要な舞台となったリオデジャネイロ県のパライバ・ド・スル河谷からサンパウロ県にかけて広がるコーヒー地帯を中心に、奴隷の代替労働力が模索された。その結果、外国人移民の大量招致が国策として検討されることになった。

3. 奴隷制廃止と外国人移民の導入

たび重なる反乱や戦争とともに、1888年の奴隷制廃止につながる一連の出来事も、外国人移民の大量導入と不可分であった。19世紀前半に奴隷の輸入が増大したのは、コーヒー栽培の労働力需要を満たすためであった。しかし、ブラジルが多額の借款を負うイギリスは奴隷貿易の禁止を強硬に迫り、1826年に「奴隷貿易禁止条約」が締結された。ブラジルは1831年に国内法を制定して、奴隷貿易禁止の厳格な履行をイギリスにアピールしたが、実際には見せかけで遵守されなかった。そのため、イギリスは1845年、奴隷貿易船を私掠船として海軍が拿捕し、関係者をイギリス法廷で裁く権限を認める「アバディーン法」を可決してブラジルに圧力をかけた。その結果、ブラジルは1850年に「エウゼビオ・デ・ケイロス法」を制定して奴隷貿易を完全に禁止した。

奴隷貿易の非合法化は、奴隷制度そのものの正当性を喪失させた。1871年には奴隷が産んだ子を自由人と認めてその解放を助成する「出生自由法（リオ・ブランコ法、自由の腹Ventre livre法）」、1885年には60歳以上の奴隷解放の道筋を定めた「セクサジェナリオスSexagenários法（サライヴァ・コテジッペSaraiva-Cotegipe法）」、そして1888年には「黄金Áurea法」が制定されて奴隷制は完全に廃止された。このような一連の動きと並行して、とりわけ1850年以降、奴隷代替労働力としての外国人移民の導入が積極的に実施されることになった（図1）。

1850年に奴隷貿易を禁止した帝国政府は、同年直ちに「土地法」を發布して、従前のセズマリア制による公有地の無償譲渡を禁止し、売買による土地の取得と登記が義務づけられた。これに

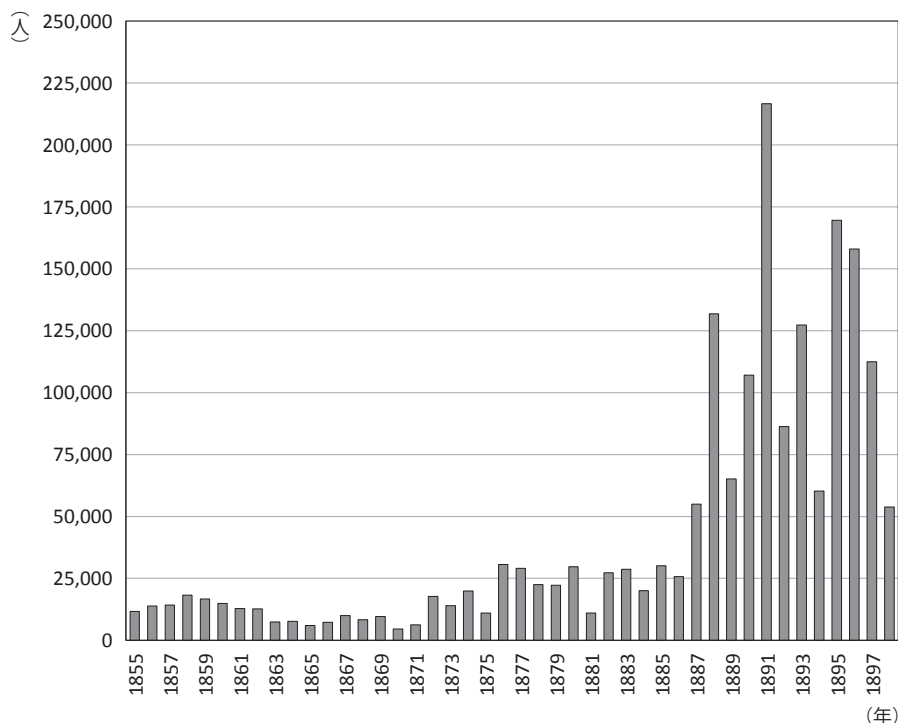


図1 ブラジルにおける移民数の推移（1855～1898年）

（外務省通商局 1932 のデータより作成）

より、外国人移民招致の大きな障害となっていた地権の不確実性に対する懸念が払拭されて移民が増加する一方で、利便性の高い広大な優良地が大地主の私有地に編入され、彼らの移殖民事業への理解と協力なくしては政府の移殖民奨励策が効果を挙げられない状況となった。そこで政府は、移殖民事業を管轄する関係機関を整備し、さまざまな特別法を公布してその対策に乗り出した。

1854年に設置された「官有地総務局」は、その後1874年には「官有地一般登記・統計委員会（Comissão do Registro Geral e Estatística das Terras Publicas）」、そして1876年には「土地植民総務局（Inspeccoria Geral das Terras e Colonização）」と組織替えを繰り返しながら、移民招致と移住地建設の双方の事業を一体的に運営・管轄できるように機能強化が図られた。また、1861年には移民の荷物輸送や税金などの便宜を図る「関税法」を公布したり、1865年には北米に向かう移民をブラジルに招致するため、ヨーロッパから移住国までの船賃の差額を支給する命令を出したりした。さらに1867年には、移民の生活や財産を保証する移住地規定を法令により公布して、ヨーロッパ移民の招致に苦心している〔外務省通商局 1932〕。

また政府は、多額の国費を使わずに大量の移民を招致するため、個人や会社に「植民会社」の設立を認め、一定の補助金を与えて移民の募集や招致、移住地建設にあたらせた。なかでも1849年にハンブルクに設立された「ハンブルク植民会社」は、1850年にドナ・フランシスカ移住地を建設するなど、とくにドイツ人移民の招致に力を尽くし、1897年には「ハンザ植民協会」に業務

が引き継がれた。しかし、実際には多くの「植民会社」が、契約内容に関わるさまざまな紛擾に直面して、契約通りに移民を招致できなかった。1871年に設立された「サンパウロ移民助成協会」は、ポルトガル語、ドイツ語、イタリア語のパンフレットを用意して、サンパウロ県の移民の実態とその有利性を海外で宣伝した。

Ⅲ ヨーロッパ移民の導入

初めて外国人移民に門戸を開いたのはジョアン6世である。1808年、ポルトガルから植民地ブラジルに亡命した彼は、直ちに植民地に科していた拘束を撤廃した。すなわち、約3世紀にわたり外国船に閉ざされていた港湾の開港、王国工業を保護するために植民地で禁じられていた製造業の禁令解除、そして外国人である自由移民の入国許可である。しかし、家族移民として農業に従事する者には、ブラジル人同様に一定の農地、農具、種苗、家畜等の生産手段を無償供与するなどの優遇措置を講じたにも関わらず、ナポレオン統治下のヨーロッパ諸国から農業移民を招致することは困難であった。そのため、1810年には中国（清朝）から苦力（クーリー）移民の導入も検討されたが実現しなかった。ブラジル独立から帝政が崩壊して共和制が敷かれるまでの68年間を概観すれば、ヨーロッパ移民でも、とりわけ19世紀前半はドイツ人移民、その後はドイツ人移民減少の穴を埋める形でイタリア人移民が、おもに開拓自営農としてブラジル南部に入植して多数の移住地を建設した時代であった。

ヨーロッパ移民の中でも、とりわけドイツ人移民が当初から主要な募集対象とされた背景には、舶来主義（transoceanismo）に取り憑かれた帝政時代の支配層に広まった人種主義思想の影響があった[三田1999]。バックル（Henry Thomas Buckle）やゴビノー（Joseph Arthur de Gobineau、在ブラジルフランス大使を歴任）らの影響を受けた当時の支配層は、黒人奴隷や混血者の存在を劣等性の証しとして悲観的に捉えた。そして、その状況からブラジルを救出するためには、ヨーロッパ移民の招致により白人の人口を増やすことで、住民の「脱アフリカ化」を実現することが必要と考える「白人化（branqueamento）」のイデオロギーが台頭し、とりわけヨーロッパ移民の中でも純血性が高く先進的なドイツ系や北欧系の移民が最適であると考えられた。

1. ドイツ人移民

ナポレオンの失脚でふたたびヨーロッパに平和が訪れると、戦禍で荒廃した国を離れて新大陸を目指す移民たちが現れた。ブラジルで最初にヨーロッパ移民が計画的に導入されたのは1818年のことで、ドイツ人博物学者ジョルジ・フライライスは王室から受領したバイア県の未開拓地にサンタ・レオポルディーナ移住地が開設されて、ドイツ人農業移民が入植した。バイア県では1822年にもサン・ジョルジ・デ・イリエウスにドイツ人が入植しているが、彼らは家族移民ではなく軍人の单身男性が中心だったため、その後ブラジルの傭兵として働くことになった。バイア県での最初の移住民事業は、総じて不首尾に終わった。

1819年にはドイツ人移民に続き、スイスのフライブルクより移民約100家族が、リオデジャネイロ県カンタガーロ郡に開設されたノーヴァ・フリブルゴ移住地に入植した（写真1、写真2）。

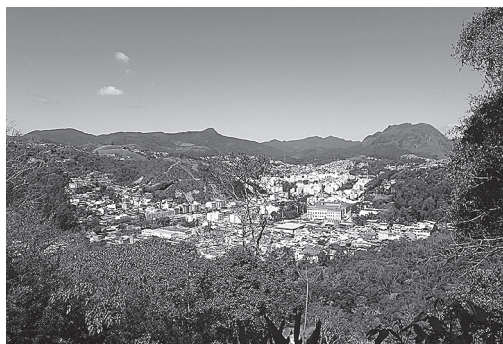


写真1 1819年にスイス人移民が創設したノーヴァ・フリブルゴ（2015年8月筆者撮影）



写真2 ノーヴァ・フリブルゴの移民の子孫（2015年8月筆者撮影）

セバスティアン＝ニコラ・ガシェの仲介で進められたこの事業では、航海中に病気などで多数の死者が出るなど問題が多かったが、1820年までに265家族1,458人が移住した。こうして、大規模なヨーロッパ移民の導入による国土開発の可能性を確認したブラジル王室は、1820年に移民契約に関する最初の法律を發布して、ヨーロッパ移民に対する全面的な歓迎と、ローマ・カトリック教徒に対するさまざまな権利や特典を認めた〔伊藤ほか 2015〕。

帝政時代になると、皇帝ドン・ペドロ1世は外国人移民、とりわけドイツ人移民の招致に力を注いだ。1824年にはシェーファー少佐の募集によりドイツ人126人がリオグランデドスル県に入植し、サン・レオポルド移住地が創設された。帝国政府よりドイツ人移民の受け入れ促進を命じられた県統領ジョゼ・ピニエイロの支援に加えて、当移住地は舟運に恵まれた都市近郊に建設されたため、その立地条件を活かして大いに発展した。そして、近隣にもドイツ人移住地が増えていった。1826年にはトレス・フォルキリヤス（リオグランデドスル県）、1829年にはサン・ペドロ・デ・アルカントラ、マフラ（サンタカタリーナ県）、リオネグロ（1853年にパラナ県としてサンパウロ県から分離）と、南部3県に次々と移住地が建設された。

折しもシスプラティーナ県（現在のウルグアイ）の独立をめぐり、アルゼンチンとの攻防が続く中、同国と国境を接する南部3県でドイツ人移民による大規模な植民開発が進展したことは、国防の観点からも高い評価を得た。実際、ドイツ人移民から多くの志願兵が生まれ、彼らの能力や資質の高さが賞賛された。また、奴隷に代わり外国人移民の自由労働力により植民開発を進める新たな国づくりの方向性についても期待と認識が高まった。

その一方で、土地分譲をめぐるトラブル（曖昧な土地所有権）、気候や風土の違いに対する不適応、補助金の不払い、プロテスタントの宗教活動に対する制限、インディオ（bugre）や現地住民との衝突や孤立、ままたらぬ子弟教育など、移民のさまざまな不平不満や生活の惨状がメディアを通して祖国に伝わり、ブラジル移民に対する悪評や警戒感が高まった。その結果、ドイツ（当時はプロイセン）政府がブラジル移住を禁じたため、ドイツ人移民は一時的に途絶える事態となった。

ブラジルにおいても、多額の費用を要する外国人移民の導入に対して否定的な意見が地方有力者などから噴出し、1830年には外国人移民へのあらゆる予算措置や保障が打ち切られることに

なった。その後、1834年には各県が帝国政府と協力しながら、独自に外国人移住地を設置できることになり、1835年にはサンタカタリーナ県のイタジャイ地方にドイツ人移民が導入された。しかし、折しも同年に勃発した「ファラーボの乱」により、南部諸県のドイツ人移民はその後10年間にわたり内乱の中に放置された。

ドイツ人移民の再開は1845年のことである。この年、王令で渡航費補助を受けたドイツ人2,000人が、ドン・ペドロ2世の避暑地ペトロポリス（リオデジャネイロ県）に入植した。また、リオグランデドスル県では1857年にサント・アンジェロ、1858年にサン・ローレンソ移住地が建設された。さらにサンタカタリーナ県では、1847年にサンタ・イザベル、ピエダーデ、1848年にレオポルディーナ、1850年にブルメナウ（ヘルマン・ブルメナウ博士が創設した一大ドイツ人移住地、写真3）、ドナ・フランシスカ、1851年にジョインヴィレ（写真4）、1853年にミリター・サンタ・テレザ、レオポルディーナ、1860年にイタジャイ、テレゾポリス、ブルスケ、とドイツ人移住地が次々と建設されて、南部3県で最もドイツ人が集積する地域となった〔Piazza and Hübener 1989〕。



写真3 ブルメナウの瀟洒な市庁舎
(2016年9月筆者撮影)



写真4 ドイツ人移民が眠るジョインヴィレの移民墓
地（1851～1913年）（2016年9月筆者撮影）

パラナ県（1853年以前はサンパウロ県の一部）では、1829年のリオネグロを嚆矢に、1852年にスベラギ（現在のグアラケサーバ）、1860年にアスンギ（現在のセロ・アズル）、1869年にアルジェリナ、1870年にピラージーニョ、1871年にサン・ヴェナンシオ、1873年にアブランチェス、1876年にラメーニャ、1877年にリヴィエラ、といった移住地が建設された。これらの移住地は、その多くがドイツ人移民だけではなく、現在のスイス、ポーランド、イタリア、ルクセンブルク、フランス、アルジェリアなどの移民がともに入植して開発を進めた点が大きな特徴である。

とりわけパラナ県では、1877～1888年に大量のドイツ人移民が入植した。その中心となったのは、1878年に帝国政府が内陸の都市近郊に設置した3つの官設移住地、すなわち（1）ポンタグロッサのオクタヴィオ移住地、（2）パルメイラのシニンブー移住地、（3）ラパのヴィルモンド移住地への入植であった〔Saffraider 2010〕。各移住地の内部には、それぞれ17、6、3つの移民集落（núcleo）が建設され、合計3,000名を超えるドイツ人が各移民集落に分配されて入植した（表1）。

このように、帝政時代を通じてブラジル南部にはたくさんの「ドイツ人」移住地が建設された

表1 パラナ県のヴォルガ・ドイツ人移住地、移民集落、入植者数（1880年）

移住地	移民集落	入植者数
オクタヴィオ	エウリディセ	62
	モエマ	160
	トリンダーデ	107
	アデライデ	173
	フロレスタ	65
	タクアリー	314
	グアラウーナ	133
	グアラウニーニャ	133
	タヴァレス・バストス	192
	チバジー	100
	ドナ・ルイザ	≥ 100
	ウヴァラナス	281
	リオ・ヴェルデ	133 ¹⁾
	サンタ・リタ	≥ 100
	イタイアコカ	192
	サンタ・マチルデ	?
	ボトゥクアラ	73 ¹⁾
	小 計	2,318
シンンブー	マルコンデス（ブガス）	108 ²⁾
	ノッサ・セニョーラ・ド・ラゴ	155 ¹⁾
	サンタ・クイテリア	110 ¹⁾
	アレグレテ	?
	ハートマン（ケロ・ケロ）	149 ¹⁾
	パパガイオス・ノヴォス	132 ¹⁾
	小 計	654
ヴィルモンド	ヴィルモンド	44
	マリエンタル	86
	ヨハニスドルフ	63
	小 計	193
合 計		3,165

1) CVGS (The Center for Volga German Studies) 資料の1878年データ。

2) Saffraider L. F. 2010 による1879年時点のデータをもとに集計。

(Lavallo A. M. 1996. *Germânia-Guaíra*. UFGP. をもとに作成)

わけだが、ここでいう「ドイツ人」とは民族としての「ドイツ人」のことであり、必ずしも現在のドイツという国家への帰属を意味していないことには注意が必要である。そもそも移民がブラジルに渡った19世紀のヨーロッパは、列強の激しい覇権争いの最中にあり、ドイツも、そして後述するイタリアも、ともに統一に向けて諸国の激しい分離・合併が繰り返された時代であった。このことは、現在の国家的枠組みで移民を論ずることの困難と限界を示唆している。ブラジルのドイツ人移民とは、厳密に言えば、中世以来繰り返されてきたドイツ人の東方植民の結果、ロシアや東・中欧に移住したドイツ語を話すドイツ系の人々（ナチ・ドイツは彼らを「民族ドイツ人」と呼んだ）のことで、実際には移住時の国籍、宗教、ドイツ語などの文化も大きく異なる

人々であったことは看過できない。

パラナ県に入植したドイツ人移民を例に述べれば、1829年に最初にリオネグロに移住したドイツ人は、プロイセン王国のトリアー出身者たちであった。しかし、1878年に設置された官設のオクタヴィオ、シニンブー、ヴィルモンド移住地に当初入植したのは、一般に「ヴォルガ・ドイツ人」と呼ばれるロシアからのドイツ人であった（写真5）。彼らはロシア皇帝エカチェリーナ2世の招きに応じて、1763～1766年にロシアのヴォルガ地方に大量に移住したドイツ人の子孫である。1871年のアレクサンドル2世の勅令により、エカチェリーナ2世の布告で認められてきたドイツ人への特権がロシア全土で全廃され、ロシア人農民と同じ身分に降格したため、彼らは1871～1914年にかけて西欧諸国や南北アメリカ大陸に国外移住を始めた〔ゲルマンほか2008〕。ちなみに、ドイツ人のヴォルガ入植の掉尾を飾るのは、1855年にプロイセンから移住したメノー派の集団であるが、彼らの子孫も1930年に難民としてサンタカタリーナ州に移住し、1932年にクリチバに転出した後、1951年にパルメイラにヴィットマルスム移住地を建設している（写真6）。



写真5 パルメイラのヴォルガ・ドイツ人子孫の住居
屋根形や軒下の垂れ飾り (lambrequins) など、家屋
の意匠が特徴的である。(2018年8月筆者撮影)



写真6 メノナイトが創建したヴィットマルスム移住
地の移民博物館 (2017年8月筆者撮影)

さらに1887～1888年を中心に、「ブコビナ人」がリオネグロ、パルメイラ、さらにラパのヴィルモンド移住地内にあるヨハネスドルフやマリエンタルに入植した〔Müller 2005〕。「ブコビナ人」とは、もとはドイツ南部のバイエルン州出身のドイツ人である。彼らは18世紀末に出身地である「バイエルンの森 (Bayerischer Wald)」から、その東方の「ボヘミアの森 (Böhmerwald)」へと移住し、さらに1838～1840年にブコビナ（現在はルーマニアの北部とウクライナの南部に分割されている地域。当時はオーストリア帝国領）へ移住した人々である。多民族が混住するブコビナは、隣接するガリツィアとともにたびたび民族運動激突の舞台となり、国境も時代とともに激しく変動した。こうした中で、1873年にはサンタカタリーナ県のサンヴェント・ド・スル、1887～1888年には上述のパラナ県各地に「ブコビナ人」が移住した。

ちなみに、パラナ州グアルプアヴァ市のエントレ・リオスに1951年に入植したドナウの「スワビア人」も、ブラジルに「小麦栽培の奇跡」を起こしたドイツ人移民の掉尾を飾る民族ドイツ人である〔Elfes 1971〕。1718年、塙土戦争でオスマン帝国に勝利したオーストリア（ハプスブル

ク君主国)は、「パッサロヴィッツ条約」により東ヨーロッパ・バルカン半島に新たな領土を獲得し、その開発者としてドイツ南西部に居住していたシュヴァーベン人をドナウ河谷の各地に移住させた。「スワビア人」とはその子孫の総称であり、彼らの国籍はユーゴスラビア（現在のセルビアやクロアチア）、ハンガリー、ルーマニアの広範囲に及んでいる。

このように、ドイツ人移民と一言でいっても、その出自、民族、文化はきわめて多様であり、彼らの日常生活の根幹をなす宗教も異なっていた。そのため、たとえばシニンブー移住地では、合計6つの移民集落のうち、3つがルター派プロテスタント、3つがカトリックの移民用に分けて設置されている。また、同じ集落内に宗教の異なる移民が混在している場合には、集落内での土地の配分を宗教別に分けるなどの工夫が行われていたことも重要である。

一方、深刻な労働力不足に陥っていたサンパウロ県のコーヒー農場では、奴隷に代わりパルセリア（分益小作）制による外国人移民の導入が試みられた [斉藤 1960]。すなわち 1847 年、サンパウロのニコラウ・ペレイラ・デ・カンポス・ヴェルゲイロ上院議員は、外国人移民に対する国有地の分譲に反対して、スイス領事の仲介により自身が所有するイビカーバ農場にドイツ人（ドイツ系スイス人も含む）80 家族を入植させた。そして、農場主と雇用者（移民）が生産物のコーヒーを折半あるいは 6:4 で分配する分益小作人のコロノ（コーヒー農場の契約家族労働者）として働かせた。国際的に奴隷貿易禁止の圧力が強まる中、開拓自営農の創設を企図する従前の移民招致とは大きく異なるパルセリア制は、深刻な労働力不足に対する新たな解決策として衆目を集めた。

しかし、奴隷と大差ない扱いや不当な締め付け、地主のたび重なる不正に不満を募らせたドイツ人移民は、1856 年に激しい労働争議を引き起こした。「ドイツ人移民は奴隷化されつつある」という現地報告が本国に伝わると、プロイセン政府は調査団を派遣して現地調査を行い、サンパウロへのコロノ移民送出を停止した。その結果、ドイツ人移民の流れは南部 3 県に向かうことになった。未だ奴隷制が残存する帝政時代に、奴隷と分益小作人が共存する労働形態には無理があったといえる。

このように、ドイツ・スイス人移民はブラジルにおける外国人移民の先駆けとして、19 世紀前半にはその中心的存在であった。外国人移民への支援が途絶し、主要な入植地であった南部で内乱が続いた 1830 年代には、移民数は一時的に大きく減少したが、1840 年代にはブラジル移民全体の約 6 割をドイツ人移民が占めるまで増加した。その後、ドイツ人移民は再び減少に転じるが、それでもまだ 1860 年代には移民総数の 15% にあたる 16,514 人を数えた [Luebke 1990]。

しかし 1870 年代以降は、とりわけイタリアを中心にさまざまな国からの移民が急増する中で、ドイツ人移民の比率は相対的に激減した。その背景には、農場での奴隷並みの扱いとか、カトリック大国のためプロテスタントの宗教活動が制限されるといった、ドイツ人移民の現状に対する否定的な報道が続く中で、1859 年にプロイセン政府が国内でのブラジル移民募集を制限する命令を行ったことがある。その一方で、ドイツ人移民の移住先はアメリカ合衆国が中心となり、1850 年代には約 98 万人（総移民数の 34.7%）、1880 年代には約 145 万人（同 27.5%）を数えた（表 2） [Luebke 1990]。

表2 年代・移住国別にみたドイツ人の移民数と移民総数に占める割合

年代	アメリカ合衆国		ブラジル	
	移民総数	ドイツ人数 (%)	移民総数	ドイツ人数 (%)
1820-29	128,502	5,753 (14.5)	7,765	2,236 ^a (30.0)
1830-39	538,381	124,726 (23.2)	2,669	207 (7.8)
1840-49	1,427,337	385,434 (27.0)	7,303	4,450 (60.9)
1850-59	2,814,554	976,072 (34.7)	117,592	15,815 (13.4)
1860-69	2,081,261	723,734 (34.8)	110,093	16,514 (15.0)
1870-79	2,742,137	751,769 (27.4)	193,931	14,627 (7.5)
1880-89	5,248,568	1,445,181 (27.5)	527,869	19,201 (3.6)
1890-99	3,694,294	579,072 (15.7)	1,205,803	15,992 (1.3)
1900-09	8,202,388	328,722 (4.0)	649,898	13,848 (2.1)
1910-19	6,347,380	174,227 (2.7)	821,458	25,902 (3.2)
1920-29	4,295,510	386,634 (9.0)	846,522	75,839 (9.0)
合計	37,520,312	5,881,324 (15.7)	4,490,903	204,721 (4.6)

a：最近の研究は、公的資料に基づくこの数字が、ドイツ人移民の数を著しく過小評価していることを示している。
(出典：Luebke 1990: 95)

2. イタリア人移民

イタリア人移民の導入は、ドイツ人移民よりも少し遅れ、1836年にジェノバ（当時はサルディーニャ王国）出身の農民ら132名が、サンタカタリーナ県ティジュカス川の河畔にノーヴァ・イタリア移住地（現在のサン・ジョアン・パティスタ）を創設している。イタリア統一運動（Risorgimento）がひとまず成功を収めて、イタリア王国が成立するのが1861年であるから、厳密に言えばそれ以前の移民は、「イタリア」の統一を巡って各地で政治的駆け引きが繰り返されていた現在のイタリア内外の小国出身者たちである。この時期にブラジルに渡った移民は少ないが、看過できないのは、イタリア統一を巡る近代化運動に関わり失脚した政治色の強い者たちがブラジルに逃れ、後にリオグランデドスル県で始まった「ファラーポの乱」に関わっていることである。

イタリア人移民の本格的な導入は、ドイツ人移民の急激な減少を埋め合わせる形で、イタリア統一運動完結後の1870年代以降に始まった。移民の多くはヴェネト州（ただし1815～1866年は、オーストリア帝国を構成するロンバルド＝ヴェネト王国）を中心とするおもにイタリア北部の出身者で、家族同伴で南部3県の未開拓地に入植した。彼らは開拓自営農として各地に移住地を建設していった。この時期、ブラジルに渡るイタリア人移民が増加した背景には、フランチェスコ・クリスピが主導する東アフリカでの移民による植民地建設という領土的進出に挫折したイタリアが、順調に移民が増加しているアメリカ大陸に目を転じ、自発的な植民地建設による民族的進出を企図したことがある [Choate 2003]。また、この時期にたびたび山間地のヴェネト州を襲った飢饉も、イタリア北部からの移民流出を促した（表3）。

表3 年代・出身地域・移住国別にみたイタリア人移民の定住者数（入国者数－出国者数）

年代	出身地域	ブラジル	アルゼンチン	アメリカ合衆国
1876-1900	北部	561,756	519,034	99,023
1876-1900	南部	252,632	282,328	673,769
1901-1913	北部	137,961	445,780	678,361
1901-1913	南部	255,201	505,190	2,486,590
小計	北部	699,717	964,814	777,384
小計	南部	507,833	787,518	3,160,359
合計		1,207,550	1,752,332	3,937,743

(出典：Lesser 2013: 92. ただし原典は Balán 1985: 97)

1870年代以降にイタリア人移民が急増した背景には、帝国政府の政策的関与があった。1871年、政府はイタリア人サビノ・トリボッチと6年間にドイツ・イタリア人移民500家族2,500人をパラナ県に招致する契約を取り交わした。また1874年にはジョアキン・カエターノ・ピント・ジュニオールと10年間で10万人のドイツ・オーストリア・スイス・イタリア人移民などを、リオグランデドスル県に招致する契約を結んでいる。このほかにも1870年代には、パラナ・リオグランデドスル両県で数多くの移民招致契約が締結された。

その結果、とりわけ1875年以降に移民が増え始め、1877年からは毎年1万人以上、1885年からは毎年2万人以上に増加して、ついに1888年には10万人を超えるイタリア人移民がブラジルに入国した。移民の主要な移住先である南部3県で、最も多くのイタリア人移民を招致したのがリオグランデドスル県で、1882～1889年には移民全体の約7～9割をイタリア人が占めていた。彼らはすでに入植していたドイツ人移民よりもさらに奥地の原生林を開拓して、畑地を作りブドウを栽培してワイン生産を行った。

すなわち、1875年にはリオグランデドスル県で最初の移住地カンポ・ドス・ブグレス（現在のカシアス・ド・スル）、ドナ・イザベル（現在のベント・ゴンサルヴェス）、コンデ・デウ（現在のガリバルディ）、ファロウピーリャ、1876年にはフロレス・ダ・クーニャ、1877年にはシルヴェイラ・マルチンス、1882年にはエンカンタド、1884年にはヴェラノポリス（現在のアルフレッド・シャヴェス）、1885年にはノーヴァ・トレント、1886年にはアントニオ・プラド、そして1892年にはグアポレト、同県の北部に広がる高原地帯を中心に次々と移住地が建設された。また、入植者の増加で土地が不足すると、移民の中には隣のサンタカタリーナ県に再移住（転耕）する者も現れた。

サンタカタリーナ県でも、1875年以降にイタリア人移民が大量に入植して、移住地建設が加速化した。同県に入植したイタリア人の約95%は、現在のヴェネト州やロンバルディア州、トレンティーノ＝アルト・アディジェ（南チロル）自治州といった、北イタリアの出身者であった。同県ではまだ奥地への交通路が未整備だったため、彼らはすでにドイツ人の移住地が建設されていたイタジャイーアス川やイタジャイーミリン川などの開析谷を遡上して、ドイツ人移住地の周辺に新たにイタリア人移住地を建設した [Piazza and Hübener 1989] (写真7・8)。



写真7 山中に拓かれたイタリア人移民の集落景観
(Guabiruba, SC) (2016年9月筆者撮影)



写真8 イタリア人移民が入植時に建設した古民家
(Guabiruba, SC) (2016年9月筆者撮影)

イタジャイーアス川の流域では、ドイツ人移住地ブルメナウの創建者として名高いブルメナウ博士の尽力により、1875年にロデイオ、リオ・ドス・セドロス、1877年にルイス・アルヴェス、1878年にアピウーナ移住地がブルメナウ近郊に開設された。また、イタジャイーミリン河谷に建設されたブルスケ（1860年にバーデン大公国のドイツ人移民が入植）の近郊には、1876年にポルト・フランコ（現在のボトゥヴェラ）、ティジュカス河谷に1836年に開設されたノーヴァ・イタリアの近郊には、1875年にノーヴァ・トレントが建設された。これらの移住地に入植したのは、当時オーストリア・ハンガリー帝国の一部であった南チロル（1919年の「サンジェルマン条約」でイタリア王国に帰属）からの移民であった。

このほかにも、トゥバラン河谷では1877年にプレジデンテ・ロッシヤ（現在のトレゼ・デ・マイオ）、ペドラス・グランデス、アザンブジャ、ウルサンガ河谷では1878年にウルサンガ、1880年にアシオリ・デ・ヴァスコンセロス（現在のコカル・ド・スル）、クリシウマ、そしてリオグランデスル県に近い南部沿岸域では、1893年にノーヴァ・ヴェネザ移住地が建設されている。

パラナ県のイタリア人移民は、すでに居住者がいる沿岸部や都市クリチバの近郊に、異なる国籍や民族の移民たちとともに移住地を建設している。同県ではイタリア人移民が大量に流入した時代に、クリチバーパラナグア鉄道（1885年着工、1902年完成）やクリチバーボンタグロッサ道路などの建設が進められており、移民たちは生活が安定するまでの期間、これら土木工事の雇用労働者として働きながら、同県の交通インフラ整備に大きく貢献した。

パラナ県にイタリア人が最初に入植したのは、ポルトガル人などと共同で建設されたジャタイ移住地で1855年のことである。また1860年には、帝国政府によりクリチバの北方にアスンギ移住地（現在のセロ・アズル）が設置され、イタリア人を含む13か国の移民が入植した。さらに、沿岸部のパラナグアには1875年にアレクサンドラ、ペレイラ、1879年にマリア・ルイザ、1888年にサンタ・クルス、ヴィスコンデ・デ・ナカル・エ・サンタ・リタ、パラナグアに近接するモヘッテスには1877年にノーヴァ・イタリア、リーニャ・エントレ・リオス、リーニャ・セズマリア、パラナグア湾岸のアントニナには1877年にイピランガ、ズルミラ、トゥルヴォなどの移住地が次々と建設された。

移住地の建設は、都市クリチバとその周辺でも活発に進められた。クリチバには1868年にアル

ジェリナ、1870年にピラージニョ、1878年にダントス、サンタ・フェリシダーデ（写真9）、同市の南東に近接するサン・ジョゼ・ドス・ピニャイスには1878年にムリシ、ザカリアス、インスペートル・カルヴァーリョ、サンタ・マリア・ド・ノーヴォ・チロル・ダ・ボッカ・ダ・セーラ、同市の北東に近接するコロンボには1878年にアルフレッド・シャヴェス、1886年にファリアス、同市の西に近接するカンポ・ラルゴには1876年にドン・ペドロ、1878年にアントニオ・ヘボウサス（写真10）、1883年にメン・デ・サー、1886年にサンタ・クリスチーナ、1887年にプレジデンテ・ファリア、1889年にバルビノ・クニャ、ドナ・マリアナ、同市の北に近接するアルミランテ・タマンダレーには1886年にサンタ・ガブリエーラ、アントニオ・プラドなど、他国移民との共同入植も含めて多数の移住地が建設された。



写真9 サンタ・フェリシダーデのワイナリー
（1873年創業）（2016年9月筆者撮影）



写真10 イタリア人移民の入植からワイン生産までのプロセスを描いた
モニュメント（アントニオ・ヘボウサス、2018年8月筆者撮影）

ちなみに、サンパウロのコーヒー農園で働く賃金労働者としてのイタリア人移民の流入は、共和制時代を迎える1889年以降20世紀初めにかけて急増した。彼らはカラブリアを中心とするおもに南イタリアからの単身男性が多かった点で、帝政時代に南部3県に入植したイタリア人移民とは性格を大きく異にしていた（表3参照）。イタリア統一以前の移民同様、リソルジメント完結後にブラジルに渡った移民の中にも、アナーキス



写真11 アナーキストが建設したセシリア移住地跡の博物館と移民研究者（2016年9月筆者撮影）

ト（無政府主義者）やマルキストといった、イタリア政府から排斥された政治色の強い移民たちが含まれていた。ピサの農学者ジョバンニ・ロッシに率いられて、パラナ州パルメイラに1890年に建設されたセシリアは、ブラジル最初のアナーキスト集落としてつとに有名である（写真11）。

Calzavara and Cassino (2012)によると、19世紀後半にイタリアからルゾフォニア（Lusophone、ポルトガル語圏）のポルトガルやブラジルに渡った移民の中には、政治的な理由により祖国を離れた者が目立つという。すなわち、ポルトガルへは19世紀前半に自由主義者が、ブラジルへは19世紀最後の四半世紀に共和制主義者、アナーキスト、社会主義者が、政府の抑圧を逃れて亡命した。ブラジルはこのような政治活動家の配所（penal settlement）としても機能した。20世紀に入りブラジルが工業化の黎明期を迎えると、彼らは労働運動を組織して労働者階級の成立に強く関与するなど、ホスト国の政治・経済活動に多大な影響を与え、結果的に今日のブラジル形成に大きく寄与したことは見逃せない。

Ⅳ おわりに

本稿では、約300年続いたポルトガルの植民地時代と決別し、独立国家としての道を歩み始めた激動のブラジル帝政時代に焦点を当てた。1822～1889年まで68年続いた帝政時代は、長い植民地時代の遺産ともいえる奴隷制度との決別を内外から迫られて苦悩した時代であった。奴隷制度の廃止は、当時のブラジル経済を支えるコーヒー農場の深刻な労働力不足を招くゆゆしき問題であった。一方で、人種主義思想に取り憑かれた当時の国家支配層にとっては、ブラジルの「劣等性」の証しである黒人奴隷や混血者の存在から、国家を救出するために避けては通れない課題に映った。

加えて、帝政時代に頻発した地方の反乱や隣接国家との戦争は、国家分裂を防ぎ領土の一体性を確保することの重要性を政府に強く認識させた。そして、隣国による直接的な領土侵攻を阻止したり、有事の際に人や物を奥地まで大量かつ迅速に輸送したりするためにも、それまで無関心だった広大な国土の隅々まで住民を入植させ、領土の一体性を確保できるように全力で植民開発に取り組む必要性があった。そのためには、沿岸部の都市より奥地に向かう鉄道や道路の敷設など、交通インフラの整備が急務であった。

このような帝政時代に露呈した難題を包括的に解決するために検討されたのが、奴隷の代替労働力となり、同時に国土（とりわけアルゼンチンやパラグアイに隣接する南部）の開発・防衛に貢献する外国人移民の大量導入であった。その際、優生学的に国民の「白人化」を促進する観点から、ヨーロッパ移民、とりわけ純血性が高く先進的なドイツ系や北欧系の移民導入が当初より目指された。

これに呼応するように、19世紀前半にはドイツ人やスイス人が中心にブラジルに移住している。その背景には、ナポレオン戦争が終結したヨーロッパから、戦禍で荒廃した祖国を逃れて新大陸を目指す移民が増加したことがある。しかし、ブラジルでドイツ人移民が置かれた状況は予想以上に悲惨なもので、彼らのさまざまな不満や生活の惨状がメディアを通して祖国に伝わり、1859年にはプロイセン政府がブラジル政府の代理人に対して国内での移民の募集を制限する

命令を発する事態となった。

その結果、19世紀後半になるとドイツ人移民が激減する中で、その穴を埋める形でイタリア人移民の招致が進められた。彼らは、とりわけイタリア統一運動完結後の1870年代以降に急増した。その主要な移住先はブラジル南部3県で、すでにドイツ人移民が入植した地域の周辺やさらにその奥地へと進入して移住地を建設し、ブドウを栽培してワイン生産を行った。また1888年に奴隷制度が廃止されると、サンパウロのコーヒー農園の労働力不足が深刻となり、イタリアはもとより、ポルトガルやスペインからも移民が積極的に招致されて、19世紀後半は南ヨーロッパからの移民受入れが全盛期を迎えた。

このように、ヨーロッパ移民の大量導入は、共和制への過渡期であった帝政時代に露呈したさまざまな国家的難題に対する包括的な解決策の一つとして企図されたものであり、その影響は今日のブラジルの国家・国民形成に広く深く関わっていることを見過すことはできない。

〔本研究はJSPS科研費JP18H00767（代表：丸山浩明）の助成を受けた〕

〈参考文献〉

- 伊藤秋仁・住田育法・富野幹雄、2015、『ブラジル国家の形成——その歴史・民族・政治——』、晃洋書房。
- 外務省通商局、1932、『伯国移植民史』、外務省。
- ゲルマン、アルカージー／イーゴリ・ブレーヴェ、2008、『ヴォルガ・ドイツ人——知られざるロシアの歴史——』、鈴木健夫・半谷史郎訳、彩流社。
- 斉藤広志、1960、『ブラジルの日本人』、丸善。
- 丸山浩明、2015、「マデイラ・マモレ鉄道建設の政治・経済・社会的意義——ブラジル旧共和制期における国土開発の試練——」、『立教大学ラテンアメリカ研究所報』第43号、71-92ページ。
- 三田千代子、1999、「ブラジルとヨーロッパ思想——悲観論からナショナル・アイデンティティの形成——」、蟬山道雄・中村雅治編、『新しいヨーロッパ像を求めて』、同文館出版、164-184ページ。
- Balán, J. 1985. *International migration in the Southern Cone*, Buenos Aires: Centro de Estudios de Estado y Sociedad.
- Calzavara, D. and C. Cassino. 2012. "The Nineteenth-Century Italian Political Migration to the Lusophone," *Mediterranean Journal of Social Sciences*, 3(8), pp. 117-124.
- Choate, M. I. 2003. "From territorial to ethnographic colonies and back again: the politics of Italian expansion, 1890-1912," *Modern Italy*, 8(1), pp. 65-75.
- Dickenson, J. P. 1982. *Brasil*, New York: Longman.
- Elfes, A. 1971. *Suábios no Paraná*, Curitiba.
- Lavalle, A. M. 1996. *Germânia-Guaíra: um século de sociedade na memória de Ponta Grossa*, Ponta Grossa: UFGP.
- Lesser, J. 2013. *Immigration, Ethnicity, and National Identity in Brazil, 1808 to the Present*, New York:

Cambridge University Press.

Luebke, F. C. 1990. *Germans in the New World: Essays in the History of Immigration*, Champaign: University of Illinois Press.

Müller, E. 2005. *Peregrinos à procura da Liberdade: Odisséia da imigração alemã no Paraná*, Curitiba: Champagnat.

Piazza, W. F. and L. M. Hübener. 1989. Santa Catarina: História da gente, Florianópolis: Lunardelli.

Saffraider, L. F. 2010. *A saga dos alemães do Volga*, Curitiba: Juruá.

(まるやま ひろあき 本研究所副所長、本学文学部教授)

<ABSTRACT>

**Introduction of European Immigrants during the Imperial Era and
Construction of Migration Sites in Brazil**

Hiroaki Maruyama

In this paper, attempts are made to clarify the reason for massive acceptance of European immigrants during the Imperial era that was characterized by the abolition of slavery, repeated local revolts and war with the neighboring countries.

The abolition of slavery was a weighty issue that led to a serious labor shortage in the coffee farm. On the other hand, for the national elites who were possessed by racist idea at that time, the abolition of slavery seemed to be an inescapable task to rescue the state from the “proof of national inferiority” identified by the existence of black slaves and mixed-race people.

In addition, the local revolt and the war with the neighboring countries got the government to recognize that the ensuring territorial integrity without national division was urgent issue. The government was forced to settle inhabitants to the hinterland of the vast territory that had been neglected until then. The acceptance of European immigrants, i.e., German in the beginning, then Italians, was considered as one of the comprehensive solutions to solve various national challenges. The acceptance of massive European immigrants has been deeply involved in today’s Brazilian nation and citizen formation.